

【秩父温泉郷】

秩父は、江戸時代（1603～1867 年）から、有名な「秩父の七湯」に観光客が頻繁に訪れる場所であり、七湯は秩父三十四観音霊場巡りで疲れた旅行者を癒すと言われてきた。これらの温泉の中で最も古いものは、1200 年以上前、日本で最初の公式通貨を造るのに青銅を採掘する過程で発見された。「薬師如来の湯（薬師の湯）」と呼ばれる源泉は、回復効果があると言われ、何世紀にもわたって地元住民が小さな切り傷、関節炎、神経痛を治療するために利用してきた。この地域の他の温泉には、美肌効果のあるミネラルが含まれており、肩こりや硬くなった関節を和らげたり、体を温めるのに役立つ。

温泉の治癒効果に加えて、日常的な環境から抜け出し、新しい場所で温浴をすることで五感を刺激するという行為そのものが、温泉旅行の重要な効果であると言われている。これは「天地効果」と呼ばれている。秩父の温泉街には多くの日帰り温泉があり、天地効果を得るのに最適である。

秩父の七湯の多くには、豊かで興味深い歴史がある。浴場と宿を備えた新木の湯は、9 世代にわたり同じ家族によって運営されてきた。温泉は、恒持神社の神様に導きかれた地元のおばあさんによって発見されたと言われている。鳩の湯は、戦国時代（1467～1568 年）に発見された。傷兵が不思議な 2 羽の鳩に導かれたのが始まりである。その兵士は、そこで数日間休息し温浴したところ、傷が治ったという。

元祖秩父七湯のうち、3 か所はもう稼働していない。「大指の湯」は、1923 年の関東大震災で倒壊した。「梁場の湯」は、1966 年に下久保ダム建設により水没した。「鹿の湯」は 1990 年代後半に閉鎖され、かつては活気に満ちていた温泉宿も今はがらんとしている。しかしその代わりに、3 つの地元の温泉が新たに秩父七湯に加わった。

秩父の温泉は、日本の他の多くの地域の温泉とは違い、地面から自然に湧き出ているわけではない。1948 年以前は、天然の湧水はその温度とミネラル含有量によって 3 つの種類に大きく分けられていた。まず、十分に温度が高く、基準値レベルのミネラル含有量またはガスを含む湧水は温泉と呼ばれ、一方、ミネラルを含有する温度の低い湧水は、温度に応じて「鉱泉」または「冷泉」と呼ばれた。秩父の泉はすべて鉱泉だったが、1948 年の温泉法の制定以降、基準が変更され、法律上、「温泉」と呼ばれるようになった。地面から引くときの湧水の温度はぬるいが、浴場にポンプで給水される前におよそ摂氏約 45 度（84°F）に加熱される。